

# 北海道の「食」の 未来を支える！

現代を生きる



北海道農協青年部協議会 会長  
全国農協青年組織協議会 理事

まさたか  
稲村 政崇 さん



←小学生への食育活動  
「大豆収穫体験」  
この後、収穫した大豆で  
豆腐作りも行いました。

今回は東裏で農業を営む傍ら、北海道農協青年部協議会（以下、道青協）の会長として、北海道の未来を担う若手農家の先頭に立って活躍されている稲村政崇さんにお話をお聞きました。

## 広い世界を見るため道外へ

130年以上続く農家の長男として生まれ、自分で5代目。苗字に「稲」がつくように、米を中心に生産しています。昔から、遊び半分で農作業を手伝うことはありましたが、両親から農家を継ぐように言われたことはありませんでした。成長するにつれ、北海道から出て外の世界を見てみたいという想いが強くなり、大学は京都の立命館大学へ進学しました。

大学卒業後、生命保険会社に就職。新潟、大阪、神奈川、熊本と社員時代は全国を転々としていました。転勤自体を辛いと思ったことはなく、日本各地を旅行しているような感覚で、異動がある4月が来るのが毎年楽しみでした。

## 家族と過ごす時間を大切に

結婚して、長女が生まれるのを機に9年間勤めた会社を退職。実

家に戻って、農業を始めました。

私にとって両親は、毎日学校から帰ると家の周りで農作業をしていて、いつも自分の近くにいてくれる心の支えでした。私も子育てをする上で、家族と一緒にいる時間をできるだけ大切にしたいと思い、農家の道を選択しました。

秋の収穫など忙しい時期もありますが、自分の裁量で仕事が進められるので、時間はもちろん、心にゆとりが生まれました。何より、子どもの成長を日々間近で見られるのが一番うれしいです。

## 農業の魅力を発信！

当別に戻ってきた直後、北いしかり農協青年部に入部。10年以上、地元を離れていたのも、周りと繋がる貴重な機会だと思い、参加しました。農協青年部は、勉強会や農業視察、イベント出店などを通じて、若手農家同士の交流を深めています。子どもたちへの食育活動も毎年行っていて、種植えから収穫、食品への加工までの流れを体感してもらうことで、食について学ぶ場を提供しています。

昨年道青協に活動の場を広げ、今年4月から会長に就任。

道青協では、北海道全体の食と農の価値を高めるため、特に情報発信に力を入れています。最近では、若者世代に農業・地域の魅力を知ってもらえるよう、Instagramでの投稿も行っています。

## 日本の食を守るために

コロナ禍を通して、今まで当たり前だと思っていたことが、次の日には当たり前でなくなってしまう実情を目の当たりにしました。年々米の消費が減ってきており、このままではいずれ日本で米が生産できなくなるという不安も抱えています。そうした先行きが見通せない時代だからこそ、今一度、消費者に食について考えてもらう機会が必要だと考えています。農業に携わるすべての人がプライドを持って、安心・安全な農作物を生産し続けられるよう、農協とも協力して知恵を絞っていきます。

また、今は若者がチャレンジするのが難しい時代になってきていると感じます。道青協の会長として、「新規就農してみたい！」「新しい作物を始めてみたい！」など、意欲ある若者たちの挑戦を全力でサポートしていきたいです。

# 歴史余話

# とらべつ

町内の防風林に面した道路や、木々が茂る公園などの緑地を歩くと、いろいろな野生の草花を見ることができます。春、白く大きな花を咲かせるミズバショウや、白い3枚の花びらが目立つオオバナノエンレイソウなどが群れ咲く姿は、遠くからでも目につきます。名前は知らなくても、なんとなく「あれかな?」と、心当たりがある方も多いのではないのでしょうか。

このような草花には、農地や宅地になる前の当別の風景や環境を、今に伝える存在と考えられる種類が多く含まれます。

たとえば、冒頭に挙げたミズバショウやオオバナノエンレイソウは、やや肥沃な低湿地に群生します。一方で、夏に防風林の縁や農道脇で、長い花茎に紫色の花を揺らすコバギボウシは、栄養分が乏しい泥炭質の湿原だった場所に多く見られます。これらの植物は、いずれも冷涼な気候の中で、何年もかけてゆっくりと成長し、長い年月を生き続けます。厄介な雑草になる植物とは対照的な生き方です。

人里の一角に残るこうした植物は、かつて当

## 第7回 身近な「歴史の生き証人」たち

北海道医療大学 薬用植物園担当 大沼 弘樹

別の平野部の大部分が、多様な環境を持つ湿地帯に覆われていた事を物語っています。

平野部に点在する雑木林や防風林、原野などは、大昔から当別に生えていた植物たちにとって、今や陸の孤島のような貴重なすみかです。既に見られなくなってしまった種類もありますが、今も見られる生き残り達は、限られた環境の中で、細々と世代を繋いできました。そして、それぞれの種類が、地球上で長い時間をかけて進化を続け、当別の地へ辿り着いた歴史を持っています。中には氷河期の名残と考えられる植物もあれば、もっと南からやってきたと考えられる植物もあります。それぞれのルーツも多様です。

一方で、グローバルな人の営みに伴って当別にやってきた、オオハンゴンソウなどの外来植物も、近年は特に目立ってきています。

このように、見慣れた景色の中にも、遠い過去から現在まで続く歴史の生き証人のような植物たちが、ひっそりと、したたかに暮らしています。



早春の湿原に咲くミズバショウ



防風林に多いオオバナノエンレイソウ



夏に咲くコバギボウシ



外来植物のオオハンゴンソウ